

☆ 自然や日常生活に目を向けて! ☆

理科の授業でめざしたい子どもの姿は、理科を学ぶことの意義や有用性を実感し、さらに理科を学ぶ意欲や科学への関心を高める様相です。文部科学省初等中等教育局教科調査官 村山哲哉氏は、理科における教材研究のポイントについて、次のように述べています。

- 子どもの興味・関心を高めているか
 - ・ 子どもが本時の対象となる自然の事物・現象に関心や意欲を高め、何らかの考えを引き出すことに直結する教材を用意し、意図的な活動を工夫する。
 - 子どもの認知的葛藤を喚起しているか
 - ・ 子どもが問題を見いだすために、まず、子どもがこれまでもっていた見方や考え方では完全に解決できない(認知的葛藤)ような教材を用意し、子どもが抱く気付きや疑問を出させる。次に、気付きや疑問を集団レベルで協議したり、教師が整理したりすることによって、子どもの考えを集約・類型化し問題点を明確にする。
 - 子どもの考えを顕在化しているか
 - ・ 子ども自らが問題解決を行うことができる状況をつくるのが重要である。そのためには、意図的に用意された教材と教師の助言、そして、友だちとのかかわりを授業内に設ける。
 - 目的をもって観察、実験できるようにしているか
 - ・ 観察は、実際の時間、空間の中で具体的な自然の存在や変化を捉えることである。視点を明確にもちそれらの様相を諸感覚を通してとらえようとする活動にする。
 - ・ 実験は、人為的に整えられた条件の下で、装置を用いるなどしながら、自然の存在や変化を捉えることである。いくつかの変数を抽出し、それらを組み合わせ、意図的に操作を加える中で、結果を得ようとする活動にする。
- そのために、授業の導入で使用した教材そのものを使用したり、それとつながる観察、実験を設定したりすることが重要である。
- 実際の自然や日常の生活に関連させているか
 - ・ 規則性などが実際の自然の中で成り立っていることに気付いたり、生活の中で役立てられていることを確かめたりすることによって、実感を伴った理解を図る。

初等教育資料 平成24年8月号 より引用

「子どもたちに、当たり前のようにある自然や日常生活につながりを感じて欲しい!」そのためには、わたしたち教師も、自然や日常生活につながりを求めて、教材研究を進めていくことが大切なのではないでしょうか。



「子ども健康教育相談」から

2学期の教育活動が順調に進む中、小1児童の相談が目立ちます。

特に、五十音の獲得が進まずに学習面の遅れが始め、心配されての来所相談です。

日本語のかなは、音と文字が対応するため、大変読みやすい特徴を持ちますが、中には、文字を見ても発音できずに読めなかったり、また、長い単語をスムーズに読めなかったりする子もいます。

特に、拗音、促音の読みに困難を示すのは、音との対応が単純でないこともあります。

一方、視覚文字の細部を視覚的に識別するのが困難で、正確に覚えきれない子もいるのです。



子どもたちの心のケアについて

＝復興に向けて「災害後に行う学校イベント」＝
【「七夕飾りづくり」実践・石巻の被災地小学校例】

石巻の被災地小学校では、7月6日に七夕飾りをつくりました。その中には「二度と津波がきませんように」や「お母さんが帰ってきますように」など、地震や津波にまつわる自分の体験から自然に出てきた言葉が多くみられました。また、「仮設住宅があたりますように」といった現実的な希望などが記載されていました。



【「効果を考慮したイベント」の工夫】

短冊にお祈りを書き、笹に飾り付けながらほかの子どもたちの書いた短冊を読んでみて希望や本音について語るの、とてもよい活動になります。

震災などで生じるストレス症状は、不安、うつ、混乱・怒りなど3つに分かれます。そしてそれぞれに対応したストレスコントロール法があります。不安症状にはリラクゼーション、うつ症状には運動・アクティベーション、そして混乱・怒り症状には認知的再体制化です。

七夕の短冊づくりは、希望や夢を考え、文章にして書き、人に見せる行為です。ぼんやりと感じていた感情や思いを、文章にすることで整理できます。これを、認知の再体制化といいます。混乱や怒り感情に対する鎮静効果が期待されています。



【日常生活・災害ストレスマネジメント教育、教師とカウンセラーのためのガイドブック】富永良喜・竹中晃二著書(サンライフ企画)引用